

## ブラジル

# 野菜生産

### 実施地域

ブラジリア



## 1. プロジェクト要請の背景

我が国は1987年～1994年にプロジェクト方式技術協力を実施し、ブラジル農牧研究公社野菜研究センターに対し、野菜生産技術の指導を行った。ブラジル政府は、この成果を(中南米諸国の野菜生産分野の状況を要記述、報告書・要約になし)中南米諸国及びポルトガル語圏アフリカ諸国に普及するため、第三国集団研修の実施を要請してきた。

## 2. プロジェクトの概要

### (1) 協力期間

1995年度～1999年度

### (2) 援助形態

第三国集団研修

### (3) 相手側実施機関

ブラジル農牧研究公社・野菜研究センター

### (4) 協力の内容

#### 1) 上位目標

中南米諸国及びポルトガル語圏アフリカ諸国において、野菜生産技術が向上する。

#### 2) プロジェクト目標

中南米諸国及びポルトガル語圏アフリカ諸国からの研修員が、野菜生産の知識及び技術を習得する。

#### 3) 成果

- 研修員が野菜育成に関する専門知識を理解する。
- 研修員が主要野菜の品種と特徴を理解する。
- 研修員が主要野菜の病虫害防除の理論と方法を理解する。
- 研修員が、実践的な野菜生産技術を理解する。

## 4) 投入

### 日本側

日本研修受入 2名

研修実施経費

### ブラジル側

講師 56名

研修施設、機材

研修経費

## 3. 調査団構成

JICA ブラジル事務所

(現地コンサルタント：Jairo Ribeiro da Silva 氏に委託)

## 4. 調査団派遣期間(調査実施時期)

1998年9月1日～1998年9月2日

## 5. 評価結果

### (1) 効率性

本研修では、我が国は研修実施経費とカウンターパート受入経費を負担し、ブラジル側が研修施設と講師を提供した。本研修の実施機関である野菜研究センターは、研究・開発の技術チーム56名のうち博士号所持者が25名、修士号所持者が26名、学士号所持者が5名であり、研修講師を務める十分な能力を有しており、講師の能力に関する研修員からの評価も高かった。

本研修では、毎回コース終了後に研修員からの意見を聴取し、その結果を翌年のコースの研修内容に反映させるなど、研修員のニーズに沿った研修を模索しつつ実施された。しかし、1998年を除き、研修員の知識・

技術レベルにばらつきがあったため、幅広い研修ニーズに応える必要に迫られた。

### (2) 目標達成度

1995年度から1998年度までの4年間で、48名が本研修を受講した。研修員は、本研修における座学と実習のバランス、現場視察の時間数、技術的な内容などについて高く評価しており、本研修を通じ、研修員は、野菜育成の専門知識、主要野菜の品種と特徴、病害虫防除の理論などを十分習得したと考えられる。技術や知識が向上したことにより、専門家として成長したという研修員からの意見も多かった。

### (3) 効果

本研修で習得した技術と知識は自国でも応用可能なものであり、研修員へのアンケート調査の結果では、研修員は帰国後、所属機関の同僚や野菜生産者に対して技術を再移転している。なかには、自国の国家野菜計画の策定に本研修の成果を活用した研修員もいた。

研修員の所属機関からも、本研修は研修員の職務遂行に極めて有効であり、機関としても本研修から十分な恩恵を受けたと高く評価されている。

### (4) 計画の妥当性

本研修では、過去4年間の合計で224名の応募があった。研修員の選抜競争率は4.6倍であり、本研修へのニーズは依然として大きく、本研修の妥当性は高いと判断される。

### (5) 自立発展性

野菜研究センターは、技術、制度、管理面では本研修を継続するための十分な実施運営能力を有するが、財政的には、現在でも負担が大きいと感じていることから、今後ブラジル側だけで、本研修を継続していくことは困難と考えられる。

## 6. 教訓・提言

### (1) 教訓

研修終了後、研修講師は参加国を訪問し、セミナー開催などの技術的支援をすることが望ましい。同時に、当該分野の現地事情についても視察し、次回の研修にフィードバックすることにより、より現地の事情に即した効果的な研修の実施が期待できる。

### (2) 提言

本研修に対するニーズは現在も高いことから、より多くの人材に研修の機会を与えるため、協力期間の延長が望ましい。



農家視察(研修旅行)



農業機械自習

## 7. フォローアップ状況

2004年度まで5年間、本研修を延長することとした。